

「オリジナリティ」や「独創性」、「自由」・・・現代ではこういった言葉をよく耳にし、必要以上に愛でる傾向がある。科学や革新的な技術は、こういった特性を持った人間が進めてきたことは間違いないだろう。しかし、派手に過去を打ち破り体系を変革するのではなく、少しずつ着実に向上していくことは尊いものである。以下には、個性偏重主義的風潮と少し異なる視点の考え方を基に、自身の経験を踏まえてスキルアップへの一つ方法を書こうと思う。

日本を含めて世界の多くの人々は、過去の偉人や天才に憧憬を抱き、伝記や逸話を愛する。そして人生についての訓示をそこから導き、いわば“正解の人生”を規定させていく。私もそうであった。科学者や技術者の伝記を読み、人生を重ね、こんな風に生きたいと強く思った時期がある。その憧れた人生の多くが、既存の常識を排斥し、新たな地平を見出そうとする信念と決意の人生であった。とりわけ時代の寵児というのは、往々にしてこうした独創性への意志が半端ないのである。例えば本田宗一郎はこんなことを言っている。「私は他人の真似は大嫌いである。私は真似が嫌いだから、うちハウチの作り方でやろうということで苦勞したわけである。」なるほど世界最高の技術者の言葉だ、と素直に感心する。

他方、日本には、仏道、茶道、武道などに、「守破離」という言葉がある。私が所属する研究室の教授が頻繁に口にする言葉で、私自身も好きな言葉である。しかし私はこの意味を、「まずは守って、それで破って、最後に離れる」ことだと思っていたのだが、どうももう少し深い意味があるらしい。「守って型に着き、破って型へ出て、離れて型を生む」(藤原凌三)。型、型、型、どこまでいっても型なのである。この言葉には、“既存の体系への反逆と挑戦”という本田宗一郎の情熱とは一味違う、“静かでゆっくりとした前進”というニュアンスが孕んでいる。決して、競争の中で相手を打ち負かしてのし上がるのではなく、自らを反省し、改めて再構築を繰り返していく感じがする。何とも優雅な考えに思えるが、極めてストイックな考え方でもある。型に着くためには、師匠の云うことに No はない。文句言わずにやるのである。落語なんかを聞いていても、江戸の職人というのはそういうものである。中には生意気な奴もいて、型からはみ出すとしょっ引かれる。しかし師匠の技はしっかり弟子に伝授され、弟子はさらに技に磨きをかけて日々研鑽し、その弟子が・・・という様に太く長い“道”が続いていくのである。「守破離」の考え方は、「ドラスティックに何かを変える」のではなく「着実に超える」ための哲学なのだと思う。

このような考えを、まともに踏襲していけば、時代を変える天才は現れない、という人がいる。私にはこのメッセージに対して巧妙な言い訳を与えることができないが、少なくとも「守破離」には、オリジナリティという言葉がひっそりと力強く生きているのだと感じる。弟子がどの師匠に就くか、何を真似るか、どう超えるか・・・ここに研鑽されてきた歴史に個人の感覚と力量が入る。むしろ、「着実に超える」ための「守破離」は、オリジナリティを積極的に認めざるを得ないのではないだろうか。そして、「守破離」は万人に優しく厳しい哲学であるということを強調したい。優しい、というのは特別な才能を持っていなくても一流への道筋が示されているという点である。厳しい、というのは一流になるための絶え間ない研鑽を要求するという点による。「変革を望む異端」の存在を積極的に肯定しないかもしれないが、「創造性を持った一流」への道筋は示されているのである。

私は現在博士後期課程の身分だが、自身の経験を思えば、正に「守破離」の過程にいるような気がする。大学の学部時代は自由な生活の中で、毎日のように神保町に繰り出して好きな本を読み、分野に捕らわれずに好きなことを勉強した。これは「型に着くための下地作り」になった。大学院に入り現在まで、研究のやり方や学会発表、論文執筆などは「守って型に着いている状態」だと思っている。もちろん、研究は人と同じことをやっては意味がないので、研究内容に新規性は存在するが、研究を包括する“営み”にはある種の「型」があるのだと思う。そしてそれは、美しく逞しいものだと最近感じるのである。将来、私がいかなる職に就こうとも、こうした考えを持ちながら仕事をしたいと思う。これが私のスキルアップへの戦略であり、一流への道標であると考えている。